

都道府県・ 指定都市番号	43	都道府県・ 指定都市名	熊本県	研究課題番号・校種名	1 高等学校
				教科名	家庭（共通教科）
研究課題	学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究 ○自立した生活者として、生涯を見通して生活上の課題を解決する能力を育成するための主体的・協働的な学習指導及び評価方法の研究				
指定年度	平成 28 年度～平成 29 年度				
ふりがな 学校名（生徒数）	くまもとけんりつだいにこうとうがっこう 熊本県立第二高等学校（1228 人）				
所在地（電話番号）	熊本県熊本市東区東町 3 丁目 13 番 1 号（096-368-4125）				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://sh.higo.ed.jp/daini/				
研究のキーワード	I C E モデル ループリック 自立度を自己評価するチェック項目 リフレクションシート 「思考」を意識した実習計画表				
研究結果のポイント	○ 授業導入部分に取り入れたジグソー法を活用した学習は、生徒の主体的活動を促し、思考を深め、知識の定着につなげることができた。 ○ 「I C E モデル」を活用した考査問題やループリック評価表を工夫することで、知識や技術の定着を図ることができた。 ○ 「自立度チェック」を実践することにより、生徒自身が自分の学習過程を認識したり、学習内容の定着を確認したりして自分の成長を実感することができ、学習意欲を高める指導につなげることができた。 ○ 実習の前後に 8 段階の自己評価を実施したことで、生徒自身が技術の定着を確認することができた。 ○ リフレクションシートの活用によって、生徒は、自分の考えを具体的にまとめたり発表したりすることができるようになった。 ○ ホームプロジェクトにループリック評価表を用いたことで、生徒は問題解決型学習への取組方法を具体的に理解することができた。 ○ 学校が熊本地震で被災したため、学習方法を工夫した。また、大学と連携した味覚調査では、味覚の科学的理解につなげる指導を工夫することができた。 ○ 学校ホームページでの情報発信は、学校の復興状況を伝えるだけでなく、家庭科の学習内容に対する理解者や協力者の増加につながった。				

1 研究主題等

(1) 研究主題

「家庭基礎」における、深い学びをもたらす指導方法等の研究
～五感を意識した科学的な理解と学習の質の向上～

(2) 研究主題設定の理由

本校理数科の家庭科の授業では、生徒のプレゼンテーション能力の向上を目的としたポスターセッションを実施してきた。昨年度は、この取組に加え、ポスターツアー等の工夫をした結果、生徒一人一人の主体的な参加が顕著になり、生徒による授業評価において高評価を得ることができた。しかし、一方では、生徒の主体的・協働的な学びを的確に評価するという点において課題がみられた。

そこで、この取組を学年全体へ広げ、これらの主体的・協働的な学びにつながる手法を積極的に導入することにより、本校の生徒が主体的に学び、協働的な活動を通して、深い学びへと導く指導方法や評価方法を研究したいと考えている。

これらのことから、生徒の「深い学び」へとつながる指導方法の工夫・改善を積み重ね、評価方法を検証することにより、生徒の学習意欲の向上につながることを期待し上記の研究主題を設定した。

(3) 研究体制

熊本県教育委員会の指導・助言のもと研究を進め、熊本県高等学校家庭部会に相談・成果報告し、県内の家庭科教師への普及を図る場や機会を設定した。

校内連携では、情報科・SSH部と連携し研究を進めた。高大連携では、熊本県立大学環境共生学部食健康科学科・尚絅大学生活科学部との連携を図った。地域連携では、熊本市食生活改善推進員協議会と連携した。

(4) 1年間の主な取組

平成 28 年度	4月	年間指導計画, シラバス, 評価規準等の作成
	5月	自立度チェックの項目作成と実施(授業開始時, 各学期末考査, 計4回)
	6月	実習前後のマークシートを活用した自己評価 「深い学び」につながる考査問題の工夫及び実施(各学期末考査計3回)
	7月	ホームプロジェクト実施の工夫(7月, 2月)
	8月	岐阜県立大垣桜高等学校・城北高等学校, 三重県立相可高等学校への学校視察
	9月	ポスターツアー実施の工夫(9月, 12月)
	11月	ICEモデル理解のための広島県立祇園北高等学校への先進校訪問と校内職員研修 教育課程研究指定事業研究授業実施(担当教育課程調査官指導訪問)
	12月	思考を意識した調理実習計画表の工夫
	1月	中間報告等の資料作成に向けた担当指導主事との打ち合わせ
	2月	研究の成果の検証と次年度への改善策の検討, 学校ホームページへの情報掲載 国立教育政策研究所研究協議会において中間報告

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

①指導手法と評価方法の改善

ア ジグソー法を活用した学習

イ 「ICEモデル」を用いた「深い学び」につながる考査問題とルーブリック評価表の作成

②振り返りの充実

ア 自立度チェックの項目作成と実施: 「熟達」「自立」を含んだ8段階評価

イ 実習前後のマークシートを活用した自己評価: 技術定着の確認

ウ リフレクションシートの活用

③ホームプロジェクト等の充実

ア ホームプロジェクトの改善

イ ホームプロジェクトの評価方法等

④実習の工夫・改善: 思考を意識した実習計画表の作成と家庭での実践

⑤公開授業・研究協議の実施: 保育領域でのポスターツアー

⑥ICEモデル理解のための先進校訪問と校内職員研修: 広島県立祇園北高等学校

(2) 具体的研究活動

①指導手法と評価方法の改善

ア ジグソー法を活用した学習

授業の導入時にジグソー法を活用した学習を取り入れ, より学習意欲を高める工夫として, 生徒グループをランダムに組み替えた。学習領域ごとにテーマ(キーワード)を設定し, 教科書の該当部分を黙読させる。その際, アウトプットの予告(教科書黙読後にグループ内で説明するという)をすることで, 生徒自身に当事者意識が生まれ(インテイク), 本気になって説明する知識を吸収しようとする生徒の姿がみられる。次に, 4人程度のグループになり, テーマ解説(アウトプット)を一人1分行う。その後, 教師による質問などを通して理解を深めさせる。教師のみの説明にならないよう発問を工夫し, 四つのテーマについて理解した後は, 問題作成や相互採点交流, ポスターツアーのテーマ決定, 次時に小テスト実施など, 授業展開を工夫し, 生徒の学習意欲を高めることができるようにした。

イ 「ICEモデル」を用いた「深い学び」につながる考査問題とルーブリック評価表の作成

「思考・判断・表現」に関して, 「ICEモデル」を活用して考査問題を工夫した。「ICEモデル」はカナダで活用されている評価モデルで, Iは知識(Ideas), Cはつながり(Connections), Eは応用(Extensions)を表している。このフレームを家庭科にあてはめると, Iレベルの問いは「この切り方の名前はなんですか?」, Cレベルの問いは「切り方をそろえるのはなぜだと考えますか?」, Eレベルは「この切り方を上手に友だちに伝えるにはどのように説明しますか?」という定義が可能になり, 自分で考えることを基本に

おいた、あなたはどうか考えるのか？ということ問いかける問題となる。このような問いは、ポスターツアーのテーマにも用いた。

このような意図で作成した考査問題は、ルーブリック評価表により生徒一人一人の解答用紙に貼付する形で評価し返却した。このことにより、生徒は評価内容を具体的に理解することができるようになった。

②振り返りの充実

ア 自立度チェックの項目作成と実施

これまで年度当初に生徒の実態把握アンケートを実施してきたが、今年度は、現行学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえ、小学校、中学校の学習内容が高校入学段階でどの程度定着しているかを把握するために自立度チェックとしてその項目を検討した。その際、生徒自らが自分の「できるレベル」を客観的かつ具体的に把握できるよう考慮した。

「自立度チェック」の実施は、授業初回時・1学期末考査・2学期末考査・学年末考査の4回とし、それぞれ前回との違いを意識させるように実施した。実施後、生徒は自分のノートに貼付し、比較ができるように工夫しポートフォリオとして活用した。生徒はいつでも自分の学習内容の定着を認識することができた。

イ 実習前後のマークシートを活用した自己評価

中学校までの学習内容の定着を図り、発展させるために①で使用した8段階の「できるレベル」評価を、実習の場面でも応用し、実習前後でどのように変化したのかを各自意識させる機会を設定した。本年6月は熊本地震により実習環境が制限された状況であったため、教材は「たたみ縁素材」を使用した製作とした。作品評価は、ルーブリック評価表を工夫し、それを生徒が見て自分の作品の具体的評価について振り返る時間を設定した。

ウ リフレクションシートの活用

生徒が自分自身を客観的に評価することができるよう振り返りの機会を、様々な場面で取り入れた。「思考・判断・表現」としての文章による振り返りを、文章表現が記載されたルーブリック評価表を用いて教師が評価するが、項目によっては生徒自身が評価することも併せて実施し、生徒の意欲の向上につなげた。

③ホームプロジェクト等の充実

ア ホームプロジェクトの改善

ホームプロジェクトの内容の充実を図るために、インストラクショナルデザイン（以下、ID）の手法を活用し、学習意欲を高めるためのアイデアを探るARCSモデルを使って指導内容の改善を図った。まず、ホームプロジェクトの最初にルーブリック評価表を生徒に渡すこと、ルーブリック評価表は記入冊子の表紙に貼付していつでも生徒が確認できるようにすること、取組の具体的条件をルーブリック評価表に文章表現で記入することなどの工夫を取り入れた。実施の流れについては、ICEモデルを含んだルーブリックを使った自己評価・相互評価、リフレクションまでを1セットとし、複数回実施することにより、生徒の学びのスパイラルを積み上げていくスタイルとした。

イ ホームプロジェクトの評価方法等

「ICEモデル」を取り入れたルーブリック評価表を作成した。作成については、マーカーペンで塗るだけで評価できる記入方法とし、自己評価・他者評価に同じルーブリック評価表を使用した。そのことを通して、自分の取組を客観的に評価することを意識させた。ポスターツアーにおいても、ホームプロジェクトルーブリック評価表と同形式としたルーブリック評価表を作成し、取組に迷うストレスがないよう配慮した。

④実習の工夫・改善

被災により調理室が使用できないため、セミナーハウスの厨房を活用し、そこで実施可能な献立や方法を工夫した。また、熊本県高等学校家庭部会地区研究会（本校が所属する市内・宇城A地区）で平成26年度に作成した動画資料（熊本県作成の学習ノート献立に基づくもの）を活用し、動画視聴→実習計画表の手順検討→家庭での実践→実習記録の提出、という反転学習を実施した。

⑤公開授業・研究協議の実施

公開授業では、保育領域でのポスターツアーの時間を設定した。ジグソー法を活用して教科書の保育領域を学んだ後、グループ別にテーマを選定し、一人B4版の担当面積で模造紙1枚のポ

スター作成を実施した。ポスター作成は手書きとし、各自の内容分担や関連を図り協力して完成させるようにした。授業では、ポスターツアーを3セット（説明2分、質問2分、評価表記録1分）実施し、相互評価表を各発表者が受け取り、続いて個人の取組へと移行した。自己評価表に基づき自己評価を行った後、文章により振り返りを行い、最後に代表数人の口頭発表を全体へ向けて実施し授業のまとめとした。その振り返りをリフレクションシートによって教師が評価し、次時の授業で総括を行った。

⑥ I C Eモデル理解のための先進校訪問と校内職員研修

広島県が I C Eモデルを県として取り入れていることから、広島県立祇園北高等学校へ担当者が訪問した。また、本校職員を対象に同校の柞磨校長先生による I C Eモデルの活用法についての研修を開催した。

3 研究の結果と今後の取組

(1) 研究の結果

- 授業導入部分に取り入れたジグソー法を活用した学習は、以前よりも生徒の積極的な発言を促すことができた。また、学習成績が低下する様子は見られないことから、活動だけでなく思考につながっていることがうかがえる。学科によって違いはあるが、従来の授業と比較すると定期考査の成績が向上している。
- 「I C Eモデル」を活用した考査問題を1学期末に作成し、その手法を学年会へ提案したところ2学期中間考査では他教科職員の考査問題作成の取組もあった。職員研修や「SSHかわら版」として発行している職員向け広報紙を通じて、全職員へ家庭科の取組を広めている。職員間でも I C Eモデルを活用した評価のあり方について関心が高まってきている。
- 「自立度チェック」は、各自ノートに「めくれば見える」ように重ねて貼らせた。学びの深まりを科学的に捉える取組として、このように、毎時間自分の学習過程や思考の段階を把握できるように工夫した。これらの取組は、生徒が自分の成長を実感することができ、生徒自身が主体的に課題を設定することができた。
- 実習前後に8段階の自己評価を実施したことで、生徒自身が技術の定着を確認することにつながった。
- リフレクションシートの活用によって、授業の振り返りの際に、生徒が自分の考えを表現する記述が増えた。
- 生徒はホームプロジェクトのルーブリック評価表を活用することで、問題解決型学習について具体的にどのように取り組むのが具体的に理解することができた。
- 学校が被災し実習が困難な状況があったため、「地域の学校」としての役割、調理実習の献立の工夫、実施方法の変更など学習内容の質を意識した指導を行った。「地域の学校」としての役割の面では、これまで10年間続く食生活改善推進員協議会との連携を継続し、地域の推進員の方とのコミュニケーションをとることを一層意識し、献立の工夫としては、災害時や一人暮らしでも活用できる「みそだま」や、50人分が一括調理できるアルファ米セットの試食体験などを取り入れた。また、熊本県立大学・尚絅大学と連携し「全口控法による五基本味・味覚調査」を体験し、味覚の科学的理解につなげることができた。実施方法の工夫については、生徒が学校で調理実習するのではなく、学校で実習の動画を視聴し、思考を意識し「段取り力」を身に付ける「実習計画表」（紙片に書かれた実習手順を、時間経過にそって紙上で考える学習教材、自作）の作成を行い、それをもとに家庭で実践するというスタイルを実施した。クラスによって取組に差はあったが、あるクラスでは約80%の生徒が家庭で取り組むことができ、生徒の感想から実習に対して達成感や意欲がうかがえた。なお、下宿等の生徒については長期休業中の実施とした。
- 学校ホームページでの情報発信は、地震後学校活動が回復し、生徒が明るく活動する様子が伝わる有効な手段であると感じる。また同時に、校内の先生方や保護者へ家庭科の学習内容や生徒の活動を理解してもらえる機会となっており、理解者や協力者の増加につながっている。

(2) 今後の取組

- 授業の工夫・改善を目指す上で、取り扱う内容の精選が最も重要であると痛感しており、指導計画の一層の内容精選を図る。
- ジグソー法を活用した学習で使用している I C T資料の内容の精選を図る。
- I Dの手法を取り入れた授業改善を更に進め、知識及び技術の確実な定着を図るための指導方法の工夫・改善を図る。
- 教科を越えて「Eレベルの考査問題」の内容の検討をすることで、生徒の学びが深まり向上していくことにつながると考えられることから、職員全体の「深い学び」への活動に向けて校内連携を図る。